

【ねがいましては】

令和6年12月30日

KYOWA SCHOOL

第415号

「なんなんだろう」

ほんとうに久しぶりの映画館でした。題名は「小学校～それは小さな社会～」。パンフレットにはいたるところに少し長めのキャッチコピーが書いてあります。「いま、小学校を知ることは、未来の日本を考えること」「私たちは、いつどうやって日本人になったのか？ありふれた公立小学校がくれる、新たな気づき」・・・これは表紙部分にあるものです。

裏面には各国での反響が載っています。「コミュニティづくりの教科書。自分たちの教育を見直す場になった」（フィンランド）。「アメリカでは子どもたちは掃除をしない。これは『自分たちのことを自分たちでやる』ということ学ぶための最高の見本だ」（アメリカ）。「日本人は小さい頃から周りと協力する意識が自然と身についている。だから地震がきても慌てず、コロナ中もうまく対応できたんだろう」（ドイツ）。「日本の子どもたちの責任感がすごい。小さな子どもを信頼する先生たちもすごい」（ギリシャ）・・・。

教育大国であるフィンランドでは、1館が20館まで拡大され、4カ月のロングランヒットになったそうです。フィンランド教育の特徴と言えば、まず給食費が小学校入学から高校まで無料。学費においては、小学校から大学院まですべて無料です。教育内容としては、授業は自主学習が中心になっており、テーマを決めて自身で調査し、レポートをまとめて発表する過程を経る授業です。生徒一人ひとりが主体となって行うことを重視しています。自身の意見をしっかり作り出すトレーニングといったところでしょうか。

皆が同じ方向へ向き、教師が児童・生徒たちの顔を正面から見つめる授業、ほぼ一方的に教師が説明・指導して終わりがちな日本の授業とは正反対のような感触です。日本では文科省主導で始まったGIGA教育構想の下、現実、教員たちは手探り状態で少しでも効率の高い授業を目指し、日々奮闘中なのですが・・・。

さて、映画の内容です。ほぼ100%学校生活でした。授業風景は「ゼロ」・・・。では何を取り上げていたか、1年生と6年生に的を絞り、入学したての1年生の面倒を6年生が見てあげる。1年生がやがて2年生になる時、新入生歓迎の演奏会練習風景や6年生が放送委員会で行う活動風景。運動会準備から、本番での活動。そして卒業式風景。先生方の葛藤など、150日間、のべ4000時間もの長期取材から生まれたものでした。げた箱の中にある靴にA・B・Cなどの評価を入れていく6年生たち。実際下駄箱の中のくつが整列された姿にはちょっとびっくりしました。その瞬間私の心に現れたシーンは、大日本帝国です。なぜか『戦争』をイメージしてしまいました。教室の清掃では、先生がホウキを持ち「このように掃きましょう」と説明しています。運動会の発表へ向けて毎日自宅前で縄跳びの練習をする6年生。新1年生歓迎会で演奏するシンバルが上手く叩けず、先生から叱責され泣き出す児童、でも「れんしゅうしてできるようになります」と、自ら発言できたことに私は心で拍手・・・。そして「できた」のです。

学校という生活の場が、やがて大人への扉を開けて社会へと巣立つ時、このような学校生活が『日本人』を作りあげているのかな？ そんな風に感じました。日本という『島』のそとから見つめる感覚です。それが世界各国の方々から大反響を呼んでいるようです。

先生方の奮闘ぶりも強調されていました。毎朝、始発電車で通勤、職員室で簡単な朝食を摂る。放課後も職員室に居残り、明日の準備、夜遅く帰宅・・・。6年生の担任が卒業式前日、職員室で先生方に、「ひょっとしたら自分は教員に向いていないのかな、もうダメかなと思うこともたくさんありました。でも、先生方に助けられながらなんとか卒業式を迎えることができました・・・。」そのあとは涙で声にならない先生・・・。やっぱり6年生の先生、子どもたちの前で一言、「・・・ダメダ・・・」声になりません。

『別れ』というものが醸し出す感情が私自身の卒業を思い起こしました。どなたにも経験のある風景です。

さて、ここで矛盾です。2020年、ユニセフ（国際連合児童基金）が発表したレポートカード16にある気になる数字です。身体的健康度38ヶ国中1位、パチパチパチ。これは子どもの死亡率が大きく起因しているようです。国民皆保険制度の恩恵ということになりそうです。次です。精神的健康度38ヶ国中37位、・・・これって何？ということ。15～19歳の自殺率では世界1位です。念のため最下位はギリシャです。自身の生活に満足していますか？という問いに対し、38ヶ国中37位、子どもたちは「生活」という語彙に何をイメージするのでしょうか。このユニセフの調査結果の中に面白いデータがあります。より多く外遊びをする子どもの方が「しあわせ」を感じるというものです。次がもっと興味深いデータ、学校への帰属意識（その集団の一員だと思ふ気持ち）の割合です。これが38ヶ国中最低レベルにあったことです。（ほぼ40%、参考例として上位のルーマニアは約80%）。

この映画が世界的に大反響を得ているのであれば、ここに掲げたユニセフの結果は何を意味しているのでしょうか。子どもたちのところに素直に問いかけてみる必要があるように思います。子どもたちの心の健康に起因しているのは、学校でもあるし、また家庭でもあります。ひざと膝を向き合わせ、『本心』をしっかりと受け止めてあげることです。

単純に解釈すれば、精神的健康度が低い→「不安」が多い。高い→「安心」が多い。だと思います。

子どもたちの「ところに添ってあげる」ことこそ、幸福度上昇の糸口であるように思います。